光生さんへ

光生さんだって、今自分でそう書いてて、びっくりしました。あなたのことを名前で呼ぶのは、ちょっと記憶にないぐらい久しぶりな気がして、何か緊張します。とりあえずご報告です。私家を出ました。部屋を見てびっくりしましたか？口開いてませんか？今説明しますので、ひとまず、それを閉めてください。

あのね、光生さん、やっぱりこのまま、一緒に住んでいるのは、変だと思います。私たちは離婚して結構だっし、何かと支障があると思うのです。どんな支障かはうまく説明できないのですが。最近どうも、またあなたのことを見ると、変にざわざわとするのです。私なりにそのざわざわを打ち消すとか、あるいは元に戻す努力を検討してみたいのですが、どちらもうまくいきませんでした。

私、あなたのことを変だとか言いましたが、どうやら誰より変なのは、私なのかもしれまえん。いろんなことの調整がうまくできないのです。好きな人とは生活上気が合わない、気が合う人は好きになれない。私、あなたの言うことやすることには、何一つも同意できないけど。でも、好きなんですね。愛情と生活はいつもぶつかって。何というか、それは私が生きる上で抱える、とても厄介な病なのです。前に映画を見に行きましたよね、ほら、私が１０分遅刻した時、横断歩道を渡ったら待ち合わせのところにあなたが立っていました。寒そうにして、ポケットに手を入れてました。この人は今私を待ってるんだそう思うと。何故か嬉しくなって、いつまでも見ていたくなりました、それは映画を見るより、ずっとすてきな光景だったのです。

あなたをこっそり見るのが好きでした。あなたは照れ屋でなかなかこっち向かないから、盗み見るチャンスはたびたびあったのです。目黒川を二人で並んで歩くとき、こっそり見てまし、ＤＶＤ見てるとき、本読んでるとき、いつもあなたを盗み見て、気持ちは自然と弾みました。桜が見える家にお嫁に来て、桜が嫌い人と一緒に暮らして。だけど、あなたが思うよりずっと私はあなたに甘えていたし。包容力っていうのは、少し違うけどあなたの膝で、くつろぐ心地よさを感じていました。一日日向にいるような。そんなまるで猫のように。もしかしたら私はこの家に住む３匹目の猫のようなものだったのかもしれまえん。

おいしいご飯ありがとう。暖かいベッドありがとう。膝の上で頭を撫でてくれてありがとう。あなたを見上げたら、見下ろしたり、まじまじ見たり、そんなことが、何よりかけがえのない幸せでした。

光生さん、ありがとう。お別れするのは自分で決めたことだけど、少し淋しい気もします、でも、もし、またあなたをこっそり見たくなった時は、あなた見ちょっと話しかけたくなった時は、また、どこかで。